

住民描く「新たな街」

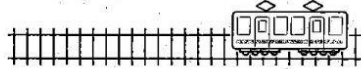


新潟の「西の玄関口」としてビジネスマンや観光客を迎え入れる上越妙高駅（上越市）。2015年3月の開業時、真新しい駅の周りには、更地が広がっていた。あれから約6年10か月。「やっと街らしくなってきたね」と、ホテルや飲食店が並ぶ駅西口で商業施設「フルサット」を運営する北信越地域資源研究所の平原匡社長（44）はしみじみと語った。

駅の東側に広がる脇野田地

コンテナ活用し店舗に

⑥ 上越妙高駅



区で育った。1982年、北陸新幹線の高崎（群馬県）―小松（石川県）間のルート概要が公表された。「この辺りに新幹線の駅ができる」と父から聞き、幼心にその風景を思い描いては心待ちにしていた。大学院を出て、恩師の紹介で佐渡に移住。能舞台の保存や活用に取り組み、佐渡観光協会（現・佐渡観光交流機構）の一員として観光ガイドを務めるなど、地域おこし活動に没頭した。佐渡の魅力にとりつかれ、「ずっと住み続けてもいいかも」とさえ思った。

だが、2011年3月の東日本大震災をきっかけに「ふるさと」を強く意識するようになった。佐渡でも、Uターンして活躍する同世代の姿に刺激を受けた。地元・上越は数年後に新幹線駅の開業を控えている。「自分のルーツは上越。これが人生の節目なのかもしれない」。ふるさとに戻る決断をした。

帰郷した12〜13年頃、北陸新幹線延伸に向けて駅やトンネルの工事が急ピッチで進んでいた。一方、上越妙高駅周辺の開発については「めぼし

ホテルなどが開業し、「街らしさ」が見えてきた上越妙高駅西口周辺（2日、上越市大和）

「個性のある人たちが集まり、新しい街をつくる」というコンセプトが具現化されてきた。大規模開発型ではなく、地元住民の力で街づくりを進めたことが功を奏した」と手応えを感じている。

北陸新幹線は23年度末に金沢（石川県）―敦賀（福井県）間が開業予定だ。上越妙高駅は関西方面とのつながりがより強くなり、「東西の結節点」として利用客の増加も期待される。

「短期滞在のビジネスマンが徒歩や鉄道移動で自由な生活できる環境を整えた。『アウトドアが楽しめるスペースを作りたい』」。さらなるにぎわい創出に向け、アイデアは尽きない。「地域資源を生かす。街の形に正解はないはず」。あくなき挑戦は続く。（宮尾真菜）



フルサットの看板の前で、「上越妙高駅ならではの魅力を掘り起こしていきたい」と語る平原さん（昨年12月3日、上越市大和で）



■上越妙高駅 上越市大和。北陸新幹線のほか、えちごトキめき鉄道の妙高はねうまラインが乗り入れる。北陸新幹線で東京まで約2時間、金沢まで約1時間。北陸新幹線の開業前の2014年10月から一時的に「脇野田駅」として使用された。

ただ、公的事業ではないことから融資がなかなか下りず、出店者集めも難航。それでも自分の考えを丁寧に説明し、理解者を増やした。そして駅開業から1年3か月後の16年6月、フルサットをオープンさせた。

こだわったのは商業用コンテナが扇形に広がる特徴的な造り。「コンテナなので拡張しやすい、街の変化とともに柔軟に姿を変えられることができ」と話す。

フルサット開業後、自身が病に倒れて車いす生活になった。

た。萬代橋上で見学していた同市中央区水道町の小学2

成人式アプリで入場 新潟

れたカメラにQRコードをかきして入場した。中原八一市長は祝辞で、

放水式

防艇や消火区で)

同市中央区水道町の小学2

US